



<https://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

新図書館バーチャル見学会 ～大学内における位置づけと新たな役割～

終了しました

時 間 : 2021年12月11日(土) 10:00-12:00 (受付9:45～)
 会 場 : オンライン開催 (Zoom)
 講 師 :
 東京大学総合図書館 原香寿子氏 (東京大学附属図書館)
 京都大学桂図書館 長坂和茂氏 (京都大学桂図書館)
 プログラム :
 10:00～10:05 挨拶・趣旨説明
 10:05～11:55 東京大学総合図書館／京都大学桂図書館オンライン見学 (質疑応答含む。)
 11:55～12:00 まとめ
 詳 細 : <https://www.daitoken.com/kyoto/event/20211211.html>

[目 次]

新図書館バーチャル見学会 ～大学内における位置づけと新たな役割～ 終了しました	…	1
小特集：大図研京都ワンディセミナー		
「入江 伸氏 (元慶應義塾大学メディアセンター本部) が隠さず話す。これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」 参加報告	…	2
大図研京都ワンディセミナー		
「入江 伸氏 (元慶應義塾大学メディアセンター本部) が隠さず話す。寺升 夕希	…	2
これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」 参加報告		
大図研京都ワンディセミナー		
「入江 伸氏 (元慶應義塾大学メディアセンター本部) が隠さず話す。福嶋 涼	…	5
これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」 参加報告		
羊図書館雑記帳 ～慣れ～	…	7
会費ご納入のお願い	…	8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール : kyoto@daitoken.com (大学図書館研究会京都地域グループ)

URL : <https://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

小特集:大図研京都ワンディセミナー**「入江 伸氏(元慶應義塾大学メディアセンター本部)が隠さず話す。これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」 参加報告****大図研京都ワンディセミナー****「入江 伸氏(元慶應義塾大学メディアセンター本部)が隠さず話す。これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」 参加報告****寺升 夕希**

2021年11月6日(土)に大図研京都ワンディセミナー「入江 伸氏(元慶應義塾大学メディアセンター本部)が隠さず話す。これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」が開催された。緊急事態宣言は解除されていたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンライン(Zoom)による開催となった。オンライン開催ということもあって40名を超える参加者が確認でき、テーマの関心の高さが感じられた。以下、入江氏の講演について報告する。なお、本報告には個人的感想が含まれることをご容赦いただきたい。

1. はじめに

講演に先立ち入江氏は、今回のセミナーを引き受けた経緯として、もともと関西では設置母体に関わらず独自の方針で運営(海外との交流や予算など)を進めてきた図書館が多く、そういった点が大変魅力的だったと述べられた。入江氏は慶應義塾大学での勤務以前からシステムエンジニアとして図書館システムの開発や導入に携わってこられたが、ご自身は「紙から電子へ変化する図書館への対応をしているだけ」なのだという。大きく分けると「業務とシステムの適用」「デジタルコンテンツの普及」「連携の推進」に分類される。そのひとつひとつについて、これまでの経験を踏まえながら説明がなされた。

2. NACSIS CAT から USMARC へ

まず最初に触れられたのが、「NACSIS CAT から USMARC への変換」である。1990年代の早稲田大学、慶應義塾大学の事情から1992年当時の慶應義塾大学メディアセンター構想や入江氏が勤務することとなったいきさつなどが紹介された。担当業務の重要課題は、システム移行であり、かつ洋書の遡及と当時のシステムによる書誌階層の畳み込みであったという。ここでは具体的な解説は省略するが、システムに長けている人ならば、この書誌階層簡略化の詳しい説明も大いに関心を引いたことと思う。システム移行に際し、大変な思いをされたのが、やはり NACSIS CAT から USMARC へというフォーマットの変更で、ハード面(モノ)だけでなくソフト面(ヒト)にも多大な影響があったという。当然のことながら目録規則の理解や教育など現場レベルでの困惑は想像に難くない。安定稼働するまで数年を要したとのことで、入江氏の言葉から、相当な苦労があったことがうかがえた。また、この頃の電子図書館構想に言及しつつ、機関リポジトリやオープンアクセス運動への疑問も呈された。

3. Google Library Project と電子学術書利用実験

次のビッグプロジェクトは2006年からの「Google Library Project」で、このニュースは図書館界だけでなく広く世間一般でも大きく報じられた。「Google Books」への参加の意義は2つあり、ひとつは「慶應義塾大学の『デジタル時代の知の構築』の実現」で、

学内のアナログ情報をデジタル化し、グローバルな公開と流通を目指す。もうひとつは「日本からの情報発信」で、国内の研究者だけでなく海外の日本研究者への貢献にあった。デジタル化のメリットは言うまでもないが、著作権調査や世界標準のメタデータ作成など課題も大きかったという。「Google Books」へ提供された資料は、著作権保護期間が満了した資料約10万冊にも及んだ。(これらの資料のうち大半が未遡及のためOPACで検索できないものであった。)余談になるが、電子化の作業をどこで行うか、提供資料がどこに運ばれるかは大学側には明かされなかったとのことである。

「Google Library Project」の今後の課題としては、画像の品質、OCRの精度、メタデータのあり方や国際連携などが挙げられた。

そして、入江氏が参加したプロジェクトで最も成功したのが、2010年から開始された学術出版社と大学図書館の連携による「電子学術書利用実験」であるという。背景には、海外と比較して国内で発行される学術書の電子化の遅れやiPadをはじめとするタブレット端末の普及があった。このプロジェクトの目的は、当然ながら日本語の学術出版物の電子化推進であるが、それだけでなく、利用環境の構築を主体に大学図書館と出版社が連携し、ビジネスモデルを検討することにあった。「電子学術書利用実験」以降、電子学術書が増加し出版社との協力体制も継続されている。

4. 早稲田大学・慶應義塾大学図書館システム共同運用

慶應義塾大学の図書館システムは、1997年CALIS→2008年Aleph→2019年Almaという変遷を辿っている。早稲田大学・慶應義塾大学図書館システム共同運用(以下、共同運用という)は、2002年からシステム利用や目録作成について検討が始まり、2017年に「連携強化に関する覚書(協定書)」を締結した。その後、2018年正式に「共同利用に関する覚書」を取り交わすに至っている。

共同運用の背景にあったのは、「紙から電子への変化」であり、図書館の統計データをもとに、資料費と受入数・入館者数・レファレンス数の推移がグラフで示された。紙と電子の図書館を運用するには、コストもスキルも必要で、加えて体制維持も難しい。こういった点から、多方面での連携が模索されることになったという。

共同運用によって資料数1000万冊を超える図書館が誕生し、そのメリットは「サービス充実」「システムの安定運用とコスト削減」「目録の標準化」「情報共有・人的交流」など多岐にわたる。その上で入江氏は、経費削減だけが目標だったわけではなく、多様化するサービスを維持・拡大しながらも図書館の体力を確保することが重要だったと補足された。早稲田大学との共同にこだわった理由としては、「紙と電子を運用する新しい枠組みの確立」や「これまでの実績と協力協定」「海外システムの利用」「業者との対等な交渉の確保」などが挙げられた。

システムの選定にあたり、共同運用の前提条件となったキーワードは「クラウド」「目録統合」「相互理解」「人材育成」などであったという。結果的にイスラエル製の図書館システムであるAlmaが選定された。Almaの最大の特徴は「脱紙の図書館システムであること」で、閲覧・貸出といった言葉は使用されず、冊子に対してはあまりきめ細やかではない。しかしながら、その特徴が「紙からの脱却」や「電子資料の統括的な取り組み」「海外コミュニティの参画」へつながることとなった。振り返って、組織的な合意を含む信頼感を得ること、目録の統合、OCLCとの交渉などは苦勞された点だという。

5. これからの図書館のキーワード

図書館における業務委託の話題は外せず、個人的な経験から思うことと前置きした上で、入江氏は、委託をめぐる動きについても話された。今後の図書館業務を考えると、専任の業務の定義とは何か、委託での高品質で安価なサービスをどう実現するか、どの

ように業務を再構築するか、システム化によるスキルの維持をどうするか、避けては通れない問題である。

これらの問題への正答はないが、最後にこれからの図書館のキーワードとして「信頼と連携」「意思決定と分散」が提示された。大学が多様化する中では、全国統一的な方針だけでなく、地域コンソーシアムのような意思決定可能な体制が求められる。大学内においても、これまで以上に他組織、他部署との連携が欠かせず、教育・研究支援において図書館が関わる余地は十分に存在すると締めくくられた。

6. おわりに

「システムの目的はシステムではなく、どんな業務ができるか、業務の最適化をはかることにある。」この言葉が印象的であった。

タイトルにあるとおり「隠さず話す」入江氏のご講演に関して、刺激のかつ手厳しい指摘もあり、おそらく参加者の受け取り方も様々であったと思われる。要所要所で参加者からコメントや意見が寄せられ、それに対する回答やさらなる意見交換が活発に行われた。入江氏の講演資料は大学図書館研究会京都地域グループの Web サイト (<https://www.daitoken.com/kyoto/event/20211106.html>) で公開されているので、より詳細な内容についてはそちらをご覧ください。

てらます ゆうき (滋賀医科大学附属図書館)

小特集: 大図研京都ワンディセミナー

「入江 伸氏(元慶應義塾大学メディアセンター本部)が隠さず話す。これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」参加報告

大図研京都ワンディセミナー

「入江 伸氏(元慶應義塾大学メディアセンター本部)が隠さず話す。これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」参加報告

福嶋 涼

2021年11月6日に開催された大図研京都ワンディセミナー「入江 伸氏(元慶應義塾大学メディアセンター本部)が隠さず話す。これまでのこと。これからの大学図書館のこと。」に参加しましたので、簡単に参加報告を書かせていただきます。なお、大図研京都地域グループの以下のウェブページに入江さんのご発表資料が掲載されていますので、詳細はぜひこちらをご覧ください。

<https://www.daitoken.com/kyoto/event/20211106.html>

さて、ご発表ではタイトル通り、入江さんのこれまでのお仕事について包み隠さず、そしてこれからの大学図書館についてのお考えについてお話しされていました。特に印象に残った3つのトピックについて記します。

まず、慶応で実施された目録フォーマットのNACISIS CATからUS MARC(現在のMARC21)への転換について。慶応に転職したばかりの入江さんがご担当されたのが、このフォーマットの転換だったそうです。システムリプレイスに合わせ、逼迫する書誌インデックスや階層化された書誌データの複雑さなどの問題を解決し、国際標準に準拠できるというメリットのもとで進められたこの大転換。大転換ゆえに周囲からは多くの批判が寄せられたそうです。批判の中で、US MARCの考え方を図書館員に浸透させ、目録作成に関する運用を検討し、目録をとれる人材を育成する…軌道に乗せるための体制構築も大変なものだったと推察します。このトピックの最後に入江さんが強調されていたのが、国際標準に準拠することの狙いでした。US MARCを使用することで、慶応が持つ知が世界に開かれ、世界的知識の形成にかかわることができるようになるという考え方。私にとっては今まで考えもしなかったことで、大変魅力的でした。

つづいて、Google Library Projectについて。Googleと提携して資料を電子化し、Google Booksで公開するこの事業についても、入江さんはご担当されていたとのこと。慶応から提供したのは、貴重な和装本3万冊強をはじめ、慶應義塾関係資料、1958年までに出版された図書など、著作権の保護期間が満了した約10万点の資料。それらの多くは遡及入力が進んでおらず、検索できないものだったそうです。OCRの精度やメタデータの在り方に入江さんは課題を感じたものの、これらの資料はGoogleに提供され、Google Booksに慶応の知的資源が追加されました。未遡及であるためにOPACですら見つけることができなかった資料が、世界に向けて本文検索ができる形で公開されたことは偉大な飛躍であったと感じました。入江さんはこの事業の狙いについて、国内の研究者だけでなく、海外の日本研究者を見据えたものだったと説明されていました。前述のUS MARCへの転換と同様に、大学が持つ知を世界的知識の文脈にどう位置付けていくか、大学図書館はそこにどのように携わることができるのかという問題意識への、ひとつの回答になると感じました。

つぎに早慶図書館システム共同運用について。2019年に実現し、大きなニュースとして報じられたこのプロジェクト。現場で主導されたのは、やはり入江さんでした。このプロジェクトが進展したのは、2010年代半ばに両大学でシステムリプレイスなどの業

務見直しのタイミングだったそうです。近年の資料をめぐる懸案といえば、やはり紙から電子への比重の転換。この転換期にあって、両大学がシステムの共同管理をおこない、目録の標準化や登録作業の効率化などを実現することで、サービスの維持・拡大をおこなうことが目指されました。両大学の歴史・規模・距離などの条件が共同運用にたえるものであり、さらには、海外システムを採用し、MARC21に準拠していたという共通点も共同の実現に大きくはたらいたそうです。図書館システムの選定にあたっては、紙資料と電子資料の管理の統合を志向し、両大学の長所である国際的なデータ流通が可能であるなどの点が考慮され、Almaが採用されました。共同運用の開始までで大変だったこととしては、目録の統合（特に分かち書きやローマ字表記などの点）やOCLCとの交渉、両大学担当者の信頼感の醸成・維持などがあげられていました。当然ですがこの共同運用は現在も継続中であり、これからも継続・発展していくものです。将来的には、共同選書、さらにはShared Printまでも射程に入れて、業務の効率化とサービスの高度化を目指しているとお話しされていました。大学の知的資産を世界に対して開き、持続可能な形で優れたサービスの在り方を探ったモデルとして、この共同運営の今後に注目したいと思いました。

最後に、入江さんがお考えになるこれからの大学図書館について、印象に残ったことを記して終わります。まず、紙の資料は今後も減り続け、さらに業務は委託化が進んでいくだろう述べられていました。そのような中で、高品質で安価なサービスを提供するためには、図書館と委託業者の間での業務の簡素化・共通化、大学の枠を越えたコンソーシアムなどでの業務内容の標準化がすすめられる必要があるとされていました。限られた人材・時間の中でサービスを維持・拡充していくために、労力を割く業務を選択してそこに注力していく。このような方法を実現するためには、図書館と業者、図書館と図書館、図書館と他部局（教育研究支援部門など）との信頼関係の構築と連携が必要であると述べておられました。これはまさに、早慶図書館システム共同運用の構築段階において、時間をかけて丁寧に議論を重ね、お互いの不信感を排した上で運用の実装までたどり着いた入江さんが実践されてきたことであると感じました。今回のお話全体を通して感じたのは、入江さんの利用者に対する強い意識でした。システムは仕様書通りに動けばよく、システム自体に興味はない。図書館員の都合を利用者の声にすり替えてはいけない。これらの趣旨のことを、いわゆるシステム屋としてお仕事をされてきた方からお聞きするのは初めてで、刺激的でした。利用者サービスに携わる新米図書館員である私としては、自分たちの都合のために利用者の声を使ってはいけないと、自らを戒める良い機会となりました。

ふくしま すずみ（東京大学総合図書館）

『羊図書館雑記帳』

水知せり様に大学図書館に関するマンガ掲載第2話です！応援コメント・ご感想などお待ちしております！

作者：水知せり

早いものでもう年末ですね。掃除はいつもしているつもりなのですが、自分が本の虫のせいか、小さな生き物と常に戦わざるを得ない日々です（笑い）

気が付くとたまる埃、そして内側に住んでいる小さな住民が暴れださないように、四苦八苦ししています。

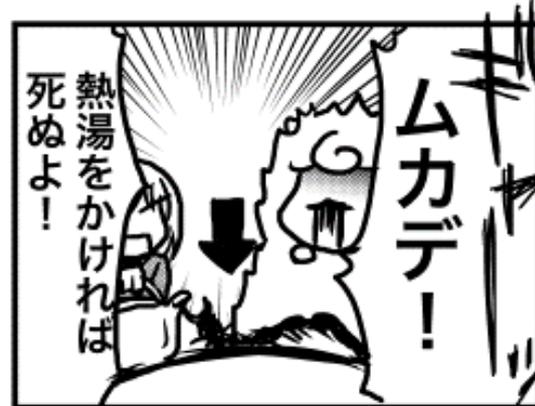
みなさまのところで何か効果的な対策を取られていましたら、ぜひ教えてください！



裁判員時代の法リテラシー：法情報・法教育の理論と実践 / 土山希美枝編著 -- 日本評論社, 2018.2 -- (龍谷大学社会科学研究所叢書；第118巻).

こちらの書籍に法律擬人化漫画を掲載していただいていますので、ぜひご一読ください！

慣れ



◇ 会費ご納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

2016/2017年度(2016年7月～2017年6月)より、大学図書館研究会会費は、すべての会員の皆さまに、直接大学図書館研究会事務局へご納入いただくこととなりました。

一括徴収方式に移行いたしましたが、京都地域グループは年度継続の前に会費をご納入いただく前納があまり進んでいない状況でございます。ワンディセミナーやグループ報は京都地域グループ費により開催・発行させていただいております。ご多忙のところ大変恐縮ですが、会費のご納入のほどよろしくお願いいたします。

会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都地域グループ費：¥2,000)/年度です。

【振込先】

郵便局 00190-2-79769 大学図書館問題研究会

■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900 ■店番 019
■預金種目 当座 ■店名 〇一九(ゼロイチキューウ店) ■口座番号 0079769

ご不明な点は大学図書館研究会事務局(会費担当)(kaihi@daitoken.com)までご連絡ください。

※ 学生会員制度(試行)として、学生の方には特典をお渡ししております。

詳細は京都地域グループ Web サイトの「学生会員制度の試行について」をご覧ください。